
7. 環境にやさしい住まいの研究－茅葺屋根の再評価と環境デザイナー

聚邑都文化研究会
(兵庫県神戸市)

I. 活動の目的と背景

1. 活動の背景

問題意識1－茅葺民家－

- ・神戸市内の民家と集落を調査した結果、西北神一带に約1200棟の茅葺民家が現存することが分かった。
- ・150万人を抱える都市の市街地近郊にこれだけ現存することは、評価できる。
- ・しかし茅葺民家は減少傾向にある。

問題意識2－都市の土地利用－

- ・計画的な土地利用の下に建設された須磨ニュータウンには、約20年を経過した現在、管理が不十分なため結果的に未利用となった土地が出現している。
- ・このような土地の多くは道路法面のような斜面緑地で、セイタカアワダチソウや茅が生い茂り、景観的に荒廃した場所であることが多い。

問題意識の融合－活動の動機－

- ・農村で不足している茅が、都市の内部に放置されていることから、これを収穫して農村に提供することができるのではないかと考えた。

2. 活動の目的

- ・茅葺屋根の機能と民家について再評価を行う。
- ・茅葺民家の今後の可能性について検討し、現代的な再生と活用案を探る。
- ・茅葺民家を支えてきた技術を有する職人との連携を図る。
- ・茅葺屋根と民家の維持における問題を明らかにする。
- ・現代の茅収集システムと茅葺技術の実験と開発を行う。
- ・茅を介して都市と農村の新しい関係を築く。
- ・さらに、今日の住まい方のデザインを求め提案する。

II. 活動の経過と内容

これまでの流れは、「職人との連携」、「茅葺民家の現状把握」、「茅刈りを中心とする実験」、そして「活動内容と趣旨のPR」を軸として、「地域や世代を超えた交流」と、「活動や技術の記録と学習」を行いつつ、活動を通じた発見を次のステップにするというプロセスであった。

これまでの活動の節目となるものを以下に挙げる。

1. 茅の刈り方講習：(93年1月24日)

- ・神戸市北区大沢町中大沢在住の農家、坂井淳二氏に茅についての基礎事項とその刈り方を学んだ。

- ・地元の溜池や農地の畦畔に繁茂する茅を素材に、鎌をはじめとする道具の使い方、作業内容や手順について講義していただいた。
2. 第1回「茅刈り」：(93年2月20、27日)
 - ・須磨ニュータウン内にある住宅・都市整備公団所有の斜面緑地約5haに繁茂する茅を刈り取った。
 - ・神戸芸術工科大学の学生と神戸エコアップ研究会のメンバーを中心に総勢37名の参加によって、約1000m²を二日間に分けて刈り取った。
 - ・茅約90束を収穫し、同量のセイタカアワダチソウを除去した。
 - ・茅、セイタカアワダチソウともに、大学へ運搬した。茅は保管、セイタカアワダチソウは焼却し、その火を囲んでバーベキューパーティーを行った。
 3. 葺き替えの記録：(93年4月11～20日)
 - ・神戸市垂水区舞子の大歳山遺跡に整備されている弥生式住居跡の屋根が20年振りに全面葺き替えされる際、2月に収穫した茅を提供した。
 - ・10日間にわたる作業を、写真やビデオで記録する一方、葺き替えに従事する職人に作業の内容や道具、技術などについてヒアリングを行った。
 4. パネル制作・展示：(93年5月)
 - ・毎年恒例の「花のフェスタ」にエコアップ研究会とともに、B0版4枚構成のパネルを制作展示し、活動の報告を行った。また、A1版4枚構成のパネルも別途制作した。
 5. 国際コンペ応募：(93年5月)
 - ・国際建築家協会、米国建築家協会共催コンペに応募。
 - ・テーマ「Sustainable Community Solutions」(維持性の高い地域計画)。
 - ・「茅プロジェクト」から「KAYATECH COMMUNITY」へ活動イメージが絞られる。
 6. 兵庫まちなみゼミ^{よかわ}吉川大会参加：(93年6月)
 - ・茅葺民家の里でこれまでの活動内容を発表。
 - ・茅葺職人との交流を行う。
 7. 民家所有者への意向調査：(93年8～11月)
 - ・屋根を金属板で被覆したり建替えられた茅葺民家も含めて約100軒を対象に、屋根の維持と主屋の用途、茅葺民家の維持における課題を探るため、アンケート調査を実施した。
 8. さし茅の記録：(93年11月)
 - ・太山寺塔頭の一つ龍象院(神戸市西区伊川谷町)の屋根は、葺き替えの時期だが茅が集まらず、応急策として、特に痛みのひどい北面と東面でさし茅が行われた。
 - ・作業は、市内北区淡河町北僧尾在住の職人、藤原静昭氏が行い、これを記録すると同時に、作業内容等についてヒアリングした。
 9. 第2回「茅刈り」：(93年12月11日)
 - ・第1回と同じ須磨ニュータウンの斜面緑地にて、2回目の茅刈りを実施。
 - ・参加者総数65名で、約2000m²を刈り取った。

- ・茅 185 束を収穫し、同量のセイタカアワダチソウを除去した。
- ・茅、セイタカアワダチソウともに、大学へ運搬した。茅は保管、セイタカアワダチソウは焼却し、その火を囲んでバーベキューパーティーを行った。



ニュータウン内の茅場



茅刈り作業

III. 結果と課題

1. 茅をめぐる

(基礎事項)

- ・素材としての茅は、扱う上で単位（束と^{そく}しめ）と単価（1200 円前後/メ）がある。
- ・かつて集落内部で「かやたのもし」と呼ばれる互助システムがあったが、現在、刈り取った茅は業者と取引きされ、さしずめ大沢ブランドとして広域に流通しているものと見られる。

(茅をめぐる問題)

- ・茅葺屋根と茅葺民家の維持における最大の問題の一つが、「茅の不足」である。これは、解決すべき最も重要な課題である。
- ・意向調査対象の茅葺民家の内、1/4 は現在も所有する農地の畦畔に茅を育て、自家調達をしている。
- ・一方、5 割を超える民家では職人等に依存しており、農地や山の造成などを背景に依存体制が今後も進行するものと考えられる。
- ・しかし茅（ススキ）自体が減少しているのではなく、農村の内部や近郊の生育地（茅場）が減少してきたことによる。
- ・人為的な生育地分布の変化が、収穫システムに変化を余儀なくさせているのが現状といえる。
- ・茅は、従来利用される人にとって身近な場所に生育し育てられてきたもので、その結果管理され、質が維持されていた。現在、業者や職人を通じて、茅の流通は広域になったが、業者や職人を通して依然その質は保たれているといえる。
- ・ニュータウンの茅の質を考えると、茅刈りの継続による茅場の育成は重要である。
- ・大歳山遺跡の住居跡に使用された茅は、職人が収集したものも合わせて、ニュータウン内で収穫されたものであり、ニュータウンの茅も実用には耐え得ることが示されたことになる。
- ・ニュータウンブランドの茅が素材として社会的地位を得るには、量の確保も欠かせない。このためには、同様の斜面緑地の発掘と、茅収集の方法の開発を検討する必要がある。

(素材としての開発)

- ・類焼の危険性の高い茅葺屋根では、防火対策を講じる必要がある。被覆もその一つだが、茅自体の難燃化処理などの技術も検討されてよい。

(茅の保管)

- ・ニュータウンで収穫された茅は、運搬と保管場所が問題となる。各地域の農業用倉庫や農協との連携による解決も考えられる。
- ・今後、必要量とストックの方法についても詳細に検討する必要がある。

(茅の生育地)

- ・斜面緑地を茅の生産地として位置付けることで同時に土地の管理を行うことになる。

2. 技術をめぐって

- ・職人は兼業がほとんどで高齢化が進み、後継者が不足している。
- ・茅葺を行う時期が農閑期に限られるため、現状では通年性のある安定した職業にはなりにくい。
- ・屋根の葺き方や材料が異なるため、地域の特性を活かしたネットワークを検討する必要がある。
- ・神戸近郊には吉川町を中心にした既存の職人集団があり、これを核にしたネットワークは可能である。
- ・職人の不足は茅の不足と合わせて、二大問題となっている。葺替えやさし茅の方法についての見直しや、技術の伝承の機会を探るなどの展開が今後は必要となる。

3. 住まいをめぐって

- ・茅葺民家では好感を持っていても、民家の持つ構造上の制約から日常生活に適合せず、建替えが進んでいる。
- ・被覆民家の方が、茅葺民家に比べて居住継続の意向が強く示された。
- ・被覆民家の場合には、兼業農家として経済的に成立しており、同居家族数も多く、被覆を行うことで茅屋根の維持における問題をとりあえず軽減すると同時に、主屋を生活に適合するように改変し続け、あるいは付属屋の住居化によって主屋と機能分担を図り、大人数を家に収容して、活力を保ち続けている。この結果、被覆はなされているものの、民家として現在もなお生き続けている。
- ・一方、茅葺民家では同居家族数の減少と同時に、茅屋根の維持における問題が深刻化しており、その結果、新築希望者が居住継続意向を上回っている。
- ・茅葺屋根と茅葺民家の価値を見直す時期がきたといえる。
- ・神戸市では、茅葺民家を保全する制度に取り組み始めた。文化財的保存ではなく、生きた住まいとして支援する制度で、経済的援助だけでなく、材料や技術の援助、情報の援助を含め、そのための基金設立が議論されている。また、民家再生を手がけている建築家や、全国の文化財を手がけている茅葺職人などを招き、地元の民家所有者や茅葺職人、有識者などとともに、「古民家倶楽部」と称する勉強会を始めている。

4. KAYATECH COMMUNITY

- ・ニュータウン内部に結果的に発生した未利用斜面地に繁茂する茅（ススキ）を刈り取り農村に提供することは、従来の都市－農村間とは異なる方向の関係をつくる契機となり得る。
- ・茅を介した、地域や世代、世界を超えた交流が可能となる。
- ・これを、我々は「KAYATECH COMMUNITY」として育んでいきたい。